

Title	モンテネグロ部族の構成
Author(s)	Richard, Zgusta
Citation	大阪外国語大学論集. 1994, 11, p. 187-202
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79650
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

モンテネグロ部族の構成

ズグスタ リチャード

1. まえがき

歴史のさまざまな時点で、記録されているいくつかのヨーロッパ周辺社会における父系制親族の足跡が、父系制出自を基盤とする初期のヨーロッパ社会であるとある研究者は仮定した。いくつかの初期の研究は19世紀の進化論に感化され、農耕・牧畜経済による親族への影響を仮定するものがほとんどであった。一般的にそれらは、その当時の経済状態がもたらした当然の結果であると結論づけ、いくつかのヨーロッパ社会の中の親族集団の足跡をこの枠組で解釈した。¹⁾ 南及び西ヨーロッパにおいて血族とフィクティブな関係を一般的に結びつけた社会集団は、歴史的には古代ギリシャ、ローマ及びバイキングにそして民族学的にはスコットランド・ハイランダーに記録されていた。ギリシャを除くバルカン半島を含んだ東ヨーロッパでは、血族的に父系制集団のタイプが2つ発見された。ひとつは、民族学上ザドルガとして知られる二世代又は、三世代の同居家庭が拡張したものでありもう1つは、クロアチア、ボスニア、セルビア特に複雑な分節部族が20世紀初頭まで残っていたモンテネグロや北アルバニアの山岳地方の父系制出自制度である。

東ヨーロッパとバルカン半島で発見された2つの社会組織の中で前述のものは、一般的にボスニア、ヘルツェヴィナ、中央及び南セルビア、南コソボ、マケドニアそして中央アルバニアに集中しており、クロアチアのいくつかの地域、南アルバニア、ブルガリア、ルーマニア、スロバキア、ルテニアそしてウクライナのいくつかの地域では少ない割合で分布している。²⁾ この社会集団は土地と家畜を含む財産を共有し、あらゆる労働から得るすべての経済物質を分け合う同居拡大家庭であると定義されている。そしてこの社会集団は、男性全員の血族組織を基礎に夫型居住となっており、その組織の規模は2つまたは3つの核家族から70または80人程の人数となっていて主に2つの特徴を持っている。1. その組織は、永久的な単位ではなく、設立、成長、全盛、衰退、消滅の段階を経る。そしてこれらの段階を社会の変遷と考える。³⁾ さらにその組織は、核家族と共存する。2. 農作業、家畜の世話、出稼ぎ、道具の修理や製造のような仕事は、全員が交替で行う。ザドルガ型の社会組織は、社会において父系制の傾向を一時的に活性化させる。その組織内の人間関係は比較的自由で、核家族のあらゆる構成員は独立した家族を作るために、または将来のザドルガが作る基礎を固めるために組織を離れることは自由である。過去に父系制の傾向を活性化させる目的は2要素であった。1. 農業のために、以前使用していなかった土地を開拓するための多くの労働力の補充。2. 主にトルコの権力者から、または地元の競争相手から

新しく手に入れた土地を守るために防衛集団を設立する。19世紀後半から20世紀初頭にこれら2つの目的が消滅したため、ザドルガ (zadruga) 型結合家庭は徐々にその数及び規模を小さくしていった。

一方分節出自制度により特徴づけられる地域の社会構造は、永久的で全員がその社会制度に属している。20世紀初頭の現在の変化した形で、完全な父系制社会が主にゲグ人 (Gheg) が居住している北アルバニア山岳地方で発見され、モンテネグロを構成する2つの地域すなわち古モンテネグロの南カルスト地方とブルダ高地の北山岳地方でも発見された。これらすべての地域は、トルコ、ベネチア及びモンテネグロなどの中央政府により統轄されている大きな町を除き、部族の土地から成っている。部族の地域は現在のものより大きかったと仮定した時、大規模な父系制民族の集団である“部族”は、12世紀から15世紀にかけてのクロアチア、ボスニア、ヘルツェゴビナ及びマケドニアの地域からの、様々な年代記に記されていた。限られた世代層 (ヴァメリヤ, vamelija) での父系制出自集団は、現在もなおセルビアで見られる。拡大家庭と違った形態を持つ地方の土地は、農耕に適さず牧畜が生活の基礎になっている。この地方でもいくつかのザドルガ型拡大家庭があるが、この形の社会組織は完全で永久的な父系制社会の中では必要とされないが、生活の基本形態を農耕に重きをおく地方にのみ限られる。

ある父系制の傾向を示唆し、過去に至る所にあったオマハ型親族用語を持つヨーロッパ社会は、封建と、現在のヨーロッパの最も一般的な双系制度から父系制の傾向を示す制度を通して「今でもヨーロッパに存在する、最も誇大的な社会制度を代表するであろう」⁴⁾ 文節部族社会であるモンテネグロと北アルバニアで、全盛を極める完全な父系制度へ渡る出自制度の長いスペクトルとして考えてもよいであろう。この論文の目的は、一般的なヨーロッパ社会における父系制部族社会の位置を突き止めるためのいくつかの予備的な概要を与えることである。次の章では、モンテネグロのブルダ (Brda) 地方における社会組織を述べる。ブルダ部族に焦点をあてた理由は、部族の社会政治組織が20世紀初頭まで残っていたからである。

2. 部族の一般的特徴

ブルダと古モンテネグロにおける最も大きい父系制単位は、セルビア語で「ブレメ」(Pleme, 部族という意味を持つ一般的なスラブ語属の単語である) といわれている。ラグサとベネチアの古文書の中の最初の歴史的記述は、14、15及び16世紀からモンテネグロ“部族”となっている。例えば、ビェロパヴリチ (Bjelopavličići) 族は溪谷の道で隊商を襲撃したことで、彼らの存在が知られるようになった山岳部族として1444年に記述されていた。ブルダ地方は、7つの部族がそれぞれ違った山塊を領土としたためこれらの部族はよくセドモロ・ブルダ (Sedmoro Brda, 7つの山) といわれる。これら7つの部族は、ビェロパヴリチ族 (1444年に最初に記述された。)、ブラトノジチ (Bratonožići) 族 (1570年)、クチ (Kući) 族 (1330年)、モラチェ (Morače) 族、

ピペリ (Piperi) 族、ロヴツィ (Rovci) 族 (1477年) そしてヴァソエヴィチ (Vasojevići) 族 (1444年) である。構造的にブルダ部族とよく似ているヘルツェボヴィナ部族と呼ばれる3つの部族があり、それは現在モンテネグロ北西部に居住するバニャニ (Banjani) 族 (1319年)、ピヴリャニ (Pivljani) 族 (1318年)、そしてドロブニャツィ (Drobnjaci) 族 (1354年) である。⁵⁾ これら全ての部族は、1850年から1890年の間にモンテネグロによって併合されるまでオスマン・トルコ帝国の一部分だったにもかかわらず、経済的、政治的、領土的に独立していた。それらの部族の人口は、クチ族やヴァソエヴィチ族のような現在60,000人以上もいる大きい部族もあれば、ビェロパヴリチ族のような20,000人以下の部族もあり、変化に富んでいる。

古モンテネグロの部族は小さい規模のものであり、これはたぶんカルスト地形のためであろうと考えられる。土壌は肥沃でなく牧畜にも農耕にも不向きで、土地は深い地盤陥没と深い溪谷で分けられたため自然な人口増加と領土拡張は不可能であった。古モンテネグロの人口は、歴史的にはほとんど不変的で古モンテネグロから、牧草地がより豊富な大きいブルダ部族へ過大な人口流出があった。16世紀と17世紀にこの部族は、ヴラディカ (vladika, ギリシャ正教の貴族主教) の支配のもとにモンテネグロ (セルビア語でツルナ・ゴラ Crna Gora) の部族連合を形成した。その目的は、主にトルコからの侵入を防ぐ自己防衛のため、そして内部の交戦を抑制するためであった。この古モンテネグロの多数の部族は4つの地区 (ナヒヤ nahija) にそれぞれを組織し、この地区はだんだん政治的、法的な権力を得ていった。1つの地区 (ツルムニチカ・ナヒヤ Crmnička nahija) では、住民たちは部族としてのアイデンティティーをほとんど失ったかわりに、その地区としてのアイデンティティーを得た。特にこの結束が弱い部族連合は、国際的に認められた国境そして代表者としての国王を持った本当の国家に発展していき、部族の身分は大きな士族ようになっていった。

北アルバニアで部族は、フィス (fis) として知られ、トルコの州 (バイラック bajrak) が顕著な地位を占めるようになったとき、フィスは19世紀半ばまで最も重要な政治的単位だった。そのようにバルカン半島の部族地域ではブルダが、20世紀初頭まで最もよく残っていた部族構造である。

伝統的なブルダ部族は地域的、経済的、政治的、法律的、軍事的、儀礼的そして社会的単位であった。それぞれの部族は、自然な陸標すなわち川や山の尾根によって形作られた明らかな境界線で区切られていた。谷はとても入りにくい溪谷で、山の頂上は森と草原から形成されていたため部族の越えにくい境界線により、文化と方言の特徴の発展を促した。このため一般的に部族の地域は地理的単位と見られた。一方、牧草地をめぐる競争心のため自然な陸標により明確に決められていなかった境界線が、よく部族間の交戦を招いた。これはブルダ地方でよく見られた出来事であった⁶⁾ 住民のほとんどが、山の斜面の中央部に分散して居住していた。縦に並んだ集落の位置は、大部分のブルダ部族が上部と下部に分けられていた (例えば別々の氏族から成る上ヴァソエヴィッチ族と下ヴァソエヴィチ族)。弱い中央政治の権力とわずかな共有地を持つ部族

では、上下に位置するその部族が2つの別々の部族であると考えられる（例えば、ボーム⁷⁾は上モラチェ族と下モラチェ族を別々の部族としてみた）。

部族は、共同で土地の所有権を持っている意味では経済単位であり、土地所有権の3つのタイプがある。

1. 核家族（ポロリツツ porodica、ファミリーヤ familija）により所有された土地は農地である。この土地は、容易に各家族間で売買ができる、しかしながら民族内のみでこの売買が行われる傾向がある。農作物は、彼らの生産物の中でわずかである。

2. 永久集落より少し離れたところに氏族（ブラットヴォ bratstvo）とその分節集団により所有された牧場がある。一般的に集落に近い牧場は氏族の分節の集団（トルブフ trbuh, ‘腹’ と呼ばれた5つぐらいの家族の集団）、そしてその牧場には名前があり互いに明確に別れている。集落からさらに離れたところ、特に山の上方は氏族のものとしてより一般化される傾向にある。氏族の土地は売買されることはできない、しかしながら各家族は不明瞭な土地を利用する為の半永久的権利をもち、この土地の利用は民族評議会で決められる。

3. 部族全体でいっしょに所有されている土地の用語は、コムニツァ (komunica) であり、氏族が所有する土地の用語も同じである。部族の土地は牧場、特に羊の夏の放牧のための高山の草はら、森、湖そして大きな川のような水資源を含んでいる。他の部族から奪った土地は長い間全ての部族の共同物として残っている。部族の土地の経済は計画され部族評議会によって与えられる、許可なしでだれもその土地で仕事をすることは出来ない。人口増加と氏族の土地を増やすための必然性、そして19世紀の終りと20世紀初めの部族構造の衰退の結果として部族の土地は、減びていきいくつかの部族の中で完全に消えた。⁸⁾

部族は、20世紀の初めまで部族の政治的そして法的に重要な単位だった。部族の政治権力の中心人物は、ヴォイヴォダ (vojvoda) 他の呼び名はトルコ語系のセルダル serdar あるいはクネズ knez、グラヴァル glavlar などの氏族のリーダーと同じ呼び名) だった。そのヴォイヴォダという呼び名の通り（ヴォイ＝軍、ヴォダ＝軍の指導者）を意味するように、彼は戦争と平和についての決定能力に長けていることを期待された。彼はまた、裁判の仲裁者としての能力を持ち合わせていることを期待された。彼は、年に最低一回は行われる部族評議会（スクプシュティナ skupština）で一番重要な人物であった。毎年ヴォイヴォダは、部族評議会投票で決定され通常追認される。ヴォイヴォダは、彼の性格、知恵そして彼の氏族の大きさと評判をもとに選出された後、一般的に彼が死去するまで再選される。ヴォイヴォダの死後、彼の息子が大抵その地位を引き継ぐ、そして彼のリネージはヴォイヴォダを作るリネージとして考えられてくる。しかしながら、この継承は永久的でなくより能力のある人物が現れると、その人は新しいヴォイヴォダとして選出され、その後いくつかの世代の間で彼の男性の子孫がこの地位を引き継ぐ。部族評議会の決議は合意のもと下され、ひとつの一般的関心事は共同地の使用や、部族が所有する水車小屋の利用の順番などを決定することであった。⁹⁾

19世紀の終わりまで部族はひとつの軍事単位でもあった。ツヴィイッチ¹⁰は、山の部族の地域の地理的なかたちだけでなく、主にその組織のために部族を砦に喩えた。分節親族制度は交戦で最大限に利用されたすなわち、部族は出自集団と一致する師団(チェタ četa)から成った統一軍隊として機能していた。戦争は絶えないことで、それらは部族内の交戦同様トルコ軍に対するものであった。トルコ軍と戦うために部族同盟を形成した場合は多かった。例として1858年に4つの部族(ロヴツィ族、モラチェ族、ヴァソエヴィチ族とドロブニャツィ族)が、コラシンというトルコの町を攻撃するための同盟を形成した。部族間の交戦の目的は主に新しい牧場と水の資源を獲得し、部族の領土を拡大するためだった。いくつかの部族はお互いに半永久的に敵対関係にあり、例えばヴァソエヴィチ族はクチ族とモラチェ族と戦争を繰り返した。部族同盟は一般的に婚姻関係、系図のごまかし、または共通のスラバを受け入れることを通し結ばれた。しかしその同盟は、一時的なものであった。¹¹

儀式形態としての部族の概念は、主にスラバの習慣に基礎を置いている。これは、一年に1度保護聖人を弔うために行われる食宴であり、それは数ヶ月間続けられる。この儀式は、モンテネグロに限らずセルゼアなど広範囲に渡り行われている。しかし、その規模はそれぞれ異なる。セルゼアにおいてスラバは父系親族集団の小さなグループによって通常祝われるか、最後の忘れられた親族関係の名残として使われているのに対しモンテネグロのスラバは、多数の各メンバーを統合した儀式で、古代の祖先を弔う儀式である。ツヴィイッチによれば、¹²スラバはあらゆる祖先(弔問)祝儀の頂点を極めるものである。それは、聖職者が祖先の記憶を揺り起こし、彼らの祈りを捧げる宗教儀式で始まる。家族にとっての最大の幸福は、スラバを祝い継続させていく為に子孫を持つことである。多少の例外を除きモンテネグロではひとつのスラバは、その部族自身によって共有されている。モンテネグロの部族はそれぞれ相互に関係がたたれている出自によって構成されており、スラバの共有は、部族の結束と彼らのアイデンティティを強化するひとつの重要な方法なのである。ほとんどの部族が、一般に部族の保護聖人を祭った教会を所有していた。そして、その教会には、その部族系統の系図本が収められている。これらの系図本は、スラバの時に教会で読み上げられた。この血族的、想像的部族の親族の儀礼化は、正教のモンテネグロ人だけでなく、北アルバニアのカトリックであるケグ人の間でも一般的な習慣とされていた。例えば、もしフェスタ(スラバと同義)が聖マリアならば、ベリシャ族の間では、「淑女ベルシャ」と呼ばれ、ミルディタ族の間では「淑女ミルディタ」と呼ばれる。¹³

最後にモンテネグロの部族は、外婚と同族結婚を基礎とする社会集団である。分節的な父系社会として外婚の規則は、非常に重要である。それぞれの部族が彼らの祖先と血縁系統の口頭伝統を保っている。次にいくつかの例を挙げてみる。

ロフツィ族は、468世帯、のべ2000人(1971年現在)から成る最も小さな部族である。部族の祖先はゴヤク族であり、古モンテネグロのニクシチ族からの避難者である。彼らは単身、2、3の移住者を含むマツレ族の住む地域へ来た。彼は、妻方居住婚により結婚し、シチェボヴィチ、

スレゾヴィチ、ヴラホヴィチ、ブラトヴィチの氏族の創始者となる息子を持つ。ゴヤクと1971年の世代の間の血族は、14～15になる。これらの4つの氏族は、今日、部族の核をなす（部族では少数派であるが）氏族の多数は、ゴヤクの後に来た他の移住民たちである。ブラトヴィチは、部族のためにヴォイヴォダを提供することによって支配的な氏族になった。¹⁴⁾ ブラトヴィチは氏族ではあるが、全ての間が、プロトヴィチの姓を持っているという訳ではない。これは、氏族の著しい分節によるものである。¹⁵⁾

ビェロパヴリチ族¹⁶⁾は、似通った口頭伝承を持っている。祖先は、北アルバニアから来たピエーリ・パヴレで、アルバニアの英雄レク・ドゥカジンの息子であると主張した。彼はルジャニ族に来てルジャニ族のルジャニの女性と結婚し、二人の息子を儲けた。かれらはミタルとブバと名付けられ、ミトロヴィチ氏族を生み出し、次の世代では分裂してミタルは4つの新しい氏族を、またブバは、ブピチ氏族を生み出した。これらが今日のビェロパヴリチ族の核であり、外婚単位である。最も古い居住者のルジャニは、内婚のせいでかなり同化した。ビェロパヴリチ族の多くの氏族は、最近新しく来た者たちの子孫である。

ブラトノジチ族¹⁷⁾の設立者はブラトであり、彼の名前は“最年少の弟”である。（彼の4人の兄たちは、ヴァソエヴィチ族の設立者のヴァソ、ピペリ族の設立者ビボ、アルバニアのホティ族のオタと、オズリニチ族のオズロである。これら全ての部族は、元来共通のスラバであり、ロヴィンスキー¹⁸⁾によると、同盟の目的で想像化親族関係を示している。）ブラトは地域の部族と結婚し2人の息子を儲けた。1人は、ただちに一族を作り、もう一人は2～4世代後に5つの氏族をつくった。1904年にはブラトから14－17世代がたった。多くの分裂を繰り返した後、ブラトの子孫はもはや完全な外婚単位ではなくなった。この部族の中心のほかにお互いに関係のない氏族は多い。一方では、元々の人口はほとんどのこっておらず、他方では現在ビェロパヴリチ族の人口の大半を占めているのは新来者の氏族である。

部族を特徴づける他の定義は内婚である。部族の核や他の氏族集団は、内婚単位をとる傾向があり部族全体としても一般的に内婚単位をとる傾向にある。原住民の人口は、様々な異族、古い移民者や新しい移民者が互いに婚姻関係を持ち、多くの場合これらの関係は長期間継続する。これが次の章の主題である。

3. モンテネグロ部族の構成

ブルダ地方の部族の人口は、基本的に種々雑多な構成である。そして分裂することを通しての分化は集合することを通しての集中性と同じぐらい重要なものであった。この地域のほとんどの部族には、3つの種類の一族がある。1. 最も弱くそして数少ないものは先住民の一族である。例えば、マタルゲ (Mataruge)、クリチャニ (Kričani)、マツレ (Macure) やルシャニ (Lužani) などである。言い伝えによれば彼らは、もともと密集して住んでいたが現在では様々な部

族の中に分散している。2. 最も強いが、しかし数的には最も多いというわけではないものは、早くから住み始めた一族である。彼らは広い範囲にわたり先住民の人口を吸収し、父系制の分節の過程を通して新しい部族を作り上げた。彼らは部族人口の中心であり、政治的力を持っている。3. もっと最近の移民部族は、部族全体の中で最も数が多いが彼らの人口は、一般に種々雑多で政治的には中心部族に頼っている。ゆえに部族は、一部だけが系図単位で人口のほとんどが部族の創始者の中心となる子孫たちに適合してきた移民である。クチ族のなかには、例えば「本物のクチ族」と呼ばれるもののように全部族のたった3分の1しか占めないものもある。残りは移民の部族である。¹⁹⁾ ピベタ族の中では、人口の2分の1以下しか中心部族に属していない。²⁰⁾ ビェロバヴリチ族の中では、中心部族が約4分の3を占める。²¹⁾ 同じ状況が古モンテネグロにもあてはまる。ツツエ (Cuce) 族とニェグシ (Njeguši) 族の中には、ボスニアとヘルツェゴヴィナからの移民が全人口の5分の3を占めている。²²⁾

これらの移民は何者なのかまた、彼らはなぜブルダ族へ来たのだろうか。データによれば、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、セルゼア、アルバニア、そしてもっと遠方の地方からも含むバルカン半島の様々な場所からの移民がいた。大多数はセルゼアとモンテネグロの他の場所からのセルゼア人であった。前者は後者とは違った移住目的を持っていた。分岐点は1389年、セルゼアがオスマントルコに敗れ、転地を余儀なくされた時である。大勢のセルゼア人の難民がセルゼアの中央部からその周辺へと移動したが、セルゼアが徐々にトルコに占領されるにつれほとんどの難民が、当時まだ多少なりとも単一的だったモンテネグロに保護を求めた。その頃までにモンテネグロ地方全体は、難民たちに親善的、社会的、軍事的保護を与える山岳民族で占められていた、スラブ民族を受け入れるにつれこれらの難民たちは、段々と部族意識に目覚めていった、もっとも未だ支配王朝に連なるセルゼア貴族としての意識を持っているものもいたが。他方ブルダ、古モンテネグロ、北アルバニアの他の部族からの移民は血の復習からの保護を求めた。地中海周辺の血の復習の習いは、特に部族地方で激しく、部族レベルから個人レベルまで全人口でかかわっている。モンテネグロの血の復習は永久的に自然で避けられないもので、多くの個人が自分の人生を隠すことを余儀なくされている。²³⁾ このことは、モンテネグロブルダ全体の難民の絶え間ない動きを生んだ。さらには、古モンテネグロのカルスト地方が多数を支え切れなかったことが、古モンテネグロからブルダへの移民の流入のもうひとつの原因を生んだ。オスマン・トルコからのセルブ難民とモンテネグロ人と血の復習から逃れた北アルバニア難民というブルダ部族への様々なタイプの移住は、目に見えるようなものではなかったが、むしろ14世紀から現代までの的確な動きをなしている。人工的には障害は少なかった。モンテネグロの人口密度は1平方キロメートルあたり50人であり²⁴⁾、この人口密度は、バルカン半島の中で最も低いもののうちのひとつである。しかし高山地方のブルダは、その半分の人口密度しかない。その人口密度は、初期の移民の時期にはもっと低かったと推測される。ここでは、経済的レベルにおいて移民を部族に統合されることが可能だった。しかし、社会的、政治的レベルにおいて移民を統合することは、どのよう

に可能であったのだろうか。部族のスラバを単純に受け入れたというのは、明らかに不十分だろう。より複雑な社会的統合の術があったに違いない。

部族の起源の伝説の3つの例は、ブルダ、古モンテネグロと北アルバニアの全域において典型的である。共通のモチーフは、地域の女性と結婚した移民の出現を含んでいる。彼らの子孫も原住民と結婚する、従ってその主な印として最初の段階は、妻方居住婚がそしてその後には相称的結婚が続く。民族的証拠を考案してみることにしよう。

婿養子を取るということは、モンテネグロ、セルゼア両国ではいたって一般的な習慣である。共に居住する義理の息子は、トマゼット (doma=家 zet=義理の息子) と呼ばれる。養子のひとつの理由は、息子のいない家庭を相続するためである。モンテネグロでは、相続は主に物質的なだけでなく (財産) スラバの相続、父系制出自集団の永続を主に意味している。この習慣が今なお残っているセルゼアや他の地方ではドマゼットは低い地位のものとしてかんがえられている。²⁹⁾ セルゼアでは、大抵貧しい家に住むものや男兄弟の多い家に住むものが妻方居住婚をする。ハメル²⁹⁾によると出生率の低いセルゼア周辺の地方では必ずしもこれが当てはまるわけではない。これらの地方では既婚男性全体の8分の1が婿養子型である、従って社会的地位は夫方居住婚をした男性よりも低いものではない。モンテネグロにでも同じことが当てはまる。妻方居住婚のもう一つの理由は労働力の確保である、たとえ家庭内に息子がいてもセルゼアでこのタイプの妻方居住婚は、主にザドルガで行われていた²⁹⁾ 全ての男性が兵士と考えられている軍事的なモンテネグロ族では結婚を通じての養子は、部族、氏族そして分節を強化するものとされてきた。

クリシチ²⁹⁾によると部族内の新しい氏族の結成は以下のとおりに行われる。まず地元の女性と結婚する移民は、女性側の氏族の牧場の一部を使う権利を得る。彼の子孫が新しい氏族の設立者と成るが新しい氏族は、未だに妻方の血族グループに頼っている。この現象はたいていグループが繁栄されたいくつかの世代後に起こる。系統では息子は、氏族の設立者とみなされる、名前さえもわすれさせるような移民としてではない。この過程はビエロパヴリチ族の中でも見られる。多くの世代のビエーリ・パヴレの子孫は原住民ルジャニ族と共に共同生活し彼ら同士は、相対結婚をする。しかしビエーリ・パヴレの子孫は、この関係のなかで支配力が強くなり、次第にルジャニを同化する様になった。後にさらに多くの移民が到着した。独身者が移民してきたとき妻方居住婚をし、移民が家族と来た場合にはビエーリ・パヴレの中心部周辺に分散している子孫グループと結婚同盟を結ぶ。ビエーリ・パヴレの子孫は止まる事無く部族の領土の中心部に居住し続け移民の氏族は、部族の居住地中心に分散して居住した。下位のピエシフツィ族の起源伝説によると名前のない祖先は、ルジャニ族のヴォイヴォダの召し使いでその後ヴォイヴォダの娘と結婚をした。そして彼の子孫は、中心的な氏族の団体 (ロサンディチ) を形成し、後にクチ族、古モンテネグロそしてセルゼアから来た移民と婚姻関係を結んだ。²⁹⁾ クリシチによると³⁰⁾ 妻方居住婚によって同化した部族の一つの特徴としては多くの移民がいるにも拘らず部族の方言が残ることである。

前述したとおり妻方居住婚はしばしば設立された氏族と部族内の新来者との一時的な婚姻交換関係を結んだ。これは小さく弱い民族が、大きく強い氏族の結婚によって養子縁組されるのと同じである。これは新しい氏族を守るだけでなく、あらゆる危険から防衛するためである。しばしば相称縁組は次第に2つの集団の同化を促す。例えば、ピペリ族はよく放牧地による氏族間の争いを防ぐ為に弱い氏族とも強い氏族とも婚姻関係を結ぶ。弱い氏族が強い氏族の名乗り強い氏族との二重外婚関係を持ちながら共通のチトゥラ (ditula) に登録する。いくつかの時代が過ぎたことにより、一重外婚氏族となった。³¹⁾ クチ族の間ではドレカロヴィチ氏族が一番強く、政治的にも支配する氏族となった。この結果として古クチ族の力は弱まった。ドレカロヴィチと力で対抗する為に彼らは、1920年代にはほとんど完成された同化を目的とする複雑な結婚縁組を作った。³²⁾ エルデリヤノヴィッチ³³⁾ はクチ族について「分節の過程を通り形成された純粋な氏族と、同化によって形成された複雑な氏族を区別した。エルデリヤノヴィッチによるとクチ族のほかの例としてはセルゼア語を話すステイエロヴィチ氏族とアルバニア語を話すヌツロヴィチの婚姻関係である。もともと彼らは2重の外婚を行っていたが新しい地方に移ると彼らは、一重外婚をし、アルバニア語を話す氏族ヌツロヴィチとなった。小人数のセルゼア語を話す血統がアルバニア語を話すマリ氏族に近接すると妻方居住婚と二重の外婚によって次第にマリ氏族に同化するまでの親族関係となった。

同様なことが北アルバニアの部族地方でも起きた。例えば、クラスニチ族 (フィス) のパルヴァタ氏族 (ヴラズニ vllazni) は、ベルバティとして知られているリネージ (バルク bark) がある。彼らはケルメンディ部族による復讐の亡命者であったが、彼らは婚姻交換によって養子縁組になった。アルバニアではこのような養子縁組を“メ・バ・ヴラ”彼を兄弟にすると表現される。³⁴⁾ (アルバニア語で氏族を意味する言葉“ヴラズニ”は、セルゼア語のプラットヴォと同じ“兄弟の縁”をいみする。)

婚姻交換は、氏族と違ったレベルでも行われている。プラトノジチ族は、部族自体が上であるプラトノジチと下であるプラトノジチの2つに別れている。上プラトノジチもしくは“真実のプラトノジチ”は、部族の先祖であったプラトの子孫であることを表す血族的関係の氏族の集団である。しかし下プラトノジチもしくはルトフツィは、相互に無縁の新来者から出来た氏族である。クリシッチによると³⁵⁾ 上プラトノジチと下プラトノジチはもともと2つの同様のモイエティーであり、それは2つの氏族の入念な婚姻交換制度によるものでもある。もしこの推測が正しければこれは、ブラダ族が上と下にわかれていることも当てはまる。このことがもっともらしいのは、以前北アルバニアでは20世紀迄外婚が行われており³⁶⁾ その中で相称的な婚姻交換があった。³⁷⁾

このことにより部族の構成は、混合によって作られたとも言える。重要な問題は親族関係の想像化である。このことについてのデータは不確かである。ホーム³⁸⁾ によると、もし彼らが自分たちの起源を操ろうとしても非系図的な部族は地元の人々によって認められてしまう。ベムはツヴィイチが「政治的統合は、親族関係の想像化がなくても成り立つ」といっていることに同意して

いる。けれどもこのことに対する数々のデータや意見もある。ロヴィンスキー³⁹⁾は、親族関係の想像化は部族のスラバは強制的な受諾によるもたどという。ピエロパヴリチ族の人々の中では、見知らぬ人の前で氏族関係の中の想像をなるべく隠そうとしている。⁴⁰⁾ たびたび拒絶され想像的な親族関係の主張は、あるレベルにおいて想像化を意味付ける。例を挙げると、プラトノジチ族の間で血縁関係を理由にある小さな原住民が、新しく大きい氏族の中に仲間入りしようとしたところ、その要求は拒否された。⁴¹⁾ 似たような親族の主張が、ピェシフシイの間でも報告されている。⁴²⁾ イヴァノヴァ⁴³⁾は、アルバニア人の想像上の血族関係の主張は、受け入れられるときもあったがその反対もあったといっている。しかしながらどちらの場合においても、一般的に婚姻交換が従った。セルゼアでは、婿養子以外の想像親族の形がいろいろ存在してもモンテネグロには、そのような習慣についての資料はなにもない。ヴウクチェリッチ⁴⁴⁾は、ブルダ部族の混合を分析する際、疑似的家族関係にあまり重きを置き過ぎると批判した。彼は力で土地を得たり、未開または、人口の少ない土地を占領したりした集団にもっと注意を向けるべきだと主張した。かれによれば、部族集団と侵略者の間で沢山の血なまぐさい争いが起こった。そのような事件は、部族内でも起こった。例えばクチ族のムルニャヴィチ氏族は、増加して新しい土地を探し始めた。彼らは、他の氏族の領土を侵し、半数を殺して残りの半数を追放した。ヴウクチェヴィッチの輪には、2つの問題がある。1. 彼は、闘争制についてほとんど例を挙げていない。(個の例の少なさについて彼は、「今日では全ての具体的な個を示すことは、明らかに不可能である。なぜならそれは、種族間の問題を引き起こすことにつながるかも知れず、私の意図するところではないからである。』」といっている。⁴⁵⁾ 2. 彼は、部族内暴力が部族評議会により厳しく抑制され、争いが起こる場合すぐに評議会に禁止されたと指摘することを忘れている。

4. 結論

次のものは、モンテネグロの部族構成過程の簡単な仮定的再構成である。

1. エーリッチによると現在のモンテネグロに紀元前1-2世紀に住んでいたイリリア系山の住民は、自治部族に構成されていた。これらの部族は、紀元前のローマ帝国支配間も繁栄していた。⁴⁶⁾ 当時の人々は、ローマ化されたスラブ人であり7世紀ごろにそこにたどりついた、したがって中世のスラブ諸国が形成されたのである。

2. スラブ帝国時代には、ジュパ (župa) と呼ばれる地区が形成され封建制度が成立した。これは、部族構成に悪い影響を与えることになった。ある歴史学者たちによると (イレチェック、シュフライ) 部族は、完全にその姿を消してしまったということだが、地理学者や民族学者によると部族は、ただ単にその勢力を弱めただけで山中に生き延びたのだらうと言う。部族は、いくつかの地域にわかれた出自グループに構成されていったことがうかがえる。部族、氏族、属氏と言ったような名称が、モンテネグロや北アルバニアの人々につかわれていることから「部族」と

という言葉がつかわれた場合それは、大きな地域に限定されたロマンス言語を話す氏々を示したのかもしれない。

3. オスマン・トルコの勝利は、大きな民族移動をもたらした。イリリア・ロマンス系地域の氏族たちが住んでいたブルダ地域は、古い氏族にくっついていくようにして共存するようになったセルゼア人が、ゆっくりと移住していった。ほとんどの研究者たちは、これらの人々がバイリンガル（ロマンス系語セルゼア語）であったとしている。バイリンガリズムの証拠として挙げられるものは、ロマンス系の親族用語（ファミリア家族、パース世代等）、そして部族の特徴（コムニツァ部族所有の土地）である。人名、土地名等もまたイリリア語系とセルゼア語系が混ざったものである。こういった仮定的バイリンガリズムの例としてクリシェヴィチ⁴⁾は、原住民族であるピェシフツイ族の名は、シュパニであったという。

4. 14世紀ごろからセルゼア人移民の末裔たちが主勢力なり、先住民グループの生き残ったものは、次第に同化していった。ブルダ人口は、国家行政の手から離れていてなによりも彼ら独自の政治体制を整えることが先決であった。分岐することをかさねながら氏族は、部族へと発展していった。部族の核を残してくということでの他の様々な地域に移民していくことをすすめた。つまり部族は、混合を基礎にし発展し続けたのである。専門的には新住者がスラバ部族を受け入れたこ、母方居住婚・婚姻同盟を通した核氏族とのつながりがあったことによってそれはなされた。部族は、次第に旗や国歌等のシンボルを含んだ親族関係に基づいた国歌の要素をみせはじめた。

5. 古モンテネグロの小さな部族たちは、部族連合として統合しそれは、のちの19世紀にモンテネグロの国歌となった。ブルダ部族は、統合されるが自治権は失わない。

6. モンテネグロがユーゴスラビアに統合された後、政治的個体としての部族の意義は失われた。しかし氏族たちは、今日もその生命力を失うことなく残っている。

最後にモンテネグロの部族は、度重なる戦争や中央集中権力の欠如と言う歴史的背景から瞬発的に成長したことを述べるべきであろう。これらの部族たちは、先住ヨーロッパ人特に、環地中海の社会的構成によって形成されたものである。これは、そこで発展した父系親族関係、血縁封建制度や他の特徴を踏まえた傾向が近づくことのがたい山々のある地理によって、よりたやすくなされというさとも付け加えておこう。

註

- 1 Friedrich, P., Proto-Indo-European Kinship, Ethnology, 5-1, 1966.
- 2 Byrnes, R., Communal Families in the Balkans: The Zadruga, University of Notre Dame Press, 1976, pp.60-61.
- 3 Hammel, E. A., Alternative Social Structures and Ritual Relations in the Balkans, Prentice-Hall, 1968, p.37.
- 4 Byrnes, op.cit., p.60.
- 5 Enciklopedija Jugoslavije, 1984.
- 6 Vlahović, V., Medjuplemenski odnosi u Brdima, Zapisi, Glasnik Cetinjskog istorijskog društva, 1939.

- 7 Boehm, C., *Montenegrin Social Organization and Values. Political Ethnography of a Refugee Area Tribal Adaptation*, AMS Press, New York, 1983.
- 8 Tomić, C., *Drobnjak, Srpski etnografski zbornik* 4, 1902.
Erdeljanović, J., *Bratonožići. Pleme u crnogorskim Brdima*, Srpski etnografski zbornik 12, 1909.
- 9 Boehm, op. cit., p.99.
- 10 Cvijić, J., *Balkansko poluostrvo*, Beograd, 1966, p.392.
- 11 Vlahović, op. cit., pp.184-185.
- 12 Boehm, op. cit., p.22.
- 13 Rovinskii, P. A., *Chernogoriia v eë proshlom i nastoiashchem*, Petrograd, 1897, p.140.
- 14 Barjaktarović, M. R., *O crnogorskim plemenima (s posebnim osvrtom na formiranje dva brdjanska plemena)* , *Zbornik za narodni život i običaje* 49, 1983, pp.57-58.
- 15 Boehm, op. cit., p.46.
- 16 Sobajić, P., *Bjelopavlići i Pjesivci. Plemena u crnogorskim Brdima*, 1923, Srpski etnografski zbornik 27.
- 17 Erdeljanović, op. cit.
- 18 Rovinskii, op. cit., p.140.
- 19 Kulišić, Š., *O etnogenezi Crnogoraca*, Titograd, 1980, p.69.
- 20 Kulišić, Š., *ibid.*, p.65.
- 21 Šobajić, op. cit., p.180.
- 22 Erdeljanović, J., *Stara Crna Gora*, Srpski etnografski zbornik 39, 1926, pp.484, 748.
- 23 Boehm, C., *Blood Revenge. The Enactment and Management of Conflict in Montenegro and Other Tribal Societies*, University of Kansas Press, 1984.
- 24 Boehm, op. cit., p.17.
- 25 Boehm, op. cit., 1983, p.24, Hammel, op. cit., p.18.
- 26 Hammel, op. cit., p.24.
- 27 *ibid.*
- 28 Kulišić, op. cit., p.56.
- 29 Šobajić, op. cit.
- 30 Kulišić, op. cit., p.54.
- 31 Šobajić, op. cit.
- 32 Ducić, S., *Život i običaji plemena Kuća*, Srpski etnografski zbornik 48, 1931.
- 33 Erdeljanović, J., *Kući, pleme u Crnoj Gori*, Srpski etnografski zbornik 8, 1907, pp.203-204.
- 34 Ivanova, I. V., *Severnaia Albaniia v 19-nachale 20v.*
Obshchestvennaia zhizn, Nauka, Moskva, 1973, p.73.
- 35 Kulišić, op. cit., p.73.
- 36 Ivanova, op. cit., p.71.
- 37 Durham, M. E., *Some Tribal Origins, Laws and Customs of the Balkans*. London, 1928.
- 38 Boehm, op. cit., pp.56-57.
- 39 Rovinskii, op. cit., p.140.
- 40 Erdeljanović, op. cit., 1909, p.510.
- 41 Vukosavljević, S., *Organizacija dinarskih plemena*, Beograd, 1957, p.21.
- 42 Šobajić, op. cit., p.301.
- 43 Ivanova, op. cit., pp.64, 73.
- 44 Vukčević, N., *Etničko porijeklo Crnogoraca*, Beograd, 1982, p.61.
- 45 *ibid.*, p.67.
- 46 Boehm, op. cit., 1983, p.82.
- 47 Kulišić, op. cit., p.62.

BIBLIOGRAPHY (partial)

- Barjaktarović, M. R.
1960 Rugova. Etnološka i antropogeografska proučavanja. SEZ 74.
- Barjaktarović, M. R.
1966 O balkanskim plemenima. Gjurmime Albanologjikë 3.
- Barjaktarović, M. R.
1983 O crnogorskim plemenima (s posebnim osvrtom na formiranje dva brdjanska plemena). Zbornik za narodni život i običaje 49.
- Barjaktarović, M. R.
1984 Rovca. Etnološka monografija. Titograd.
- Blagojević, O.
1971 Piva. Posebna izdanja SANU CDXLIII.
- Boehm, C.
1983 Montenegrin Social Organization and Values. Political Ethnography of a Refugee Area Tribal Adaptation. AMS Press, New York.
- Boehm, C.
1984 Blood Revenge. The Enactment and Management of Conflict in Montenegro and Other Tribal Societies. U. of Kansas Press, Lawrence.
- Coon, C.
1950 The Mountains of Giants. A Racial and Cultural Study of the North Albanian Mountain Ghegs. Peabody Museum Papers 23-3.
- Cozzi, D. E.
1910 La vendetta del sangue nelle montagne dell'Alta Albania. Anthropos 5.
- Čubrilović, V.
1959 Terminologija plemenskog društva u Crnoj Gori. Beograd.
- Čubrilović, V.
1963 Postanak plemena Kuća. ZFFBU.
- Čubrilović, V.
1964 Malonsići, pleme u Crnoj Gori. ZFFBU.
- Cvijić, J.
1918 La Péninsule Balcanique. Géographie Humaine. Paris.
- Cvijić, J.
1966 Balkansko poluostrvo, II. Beograd.
- Denton, W.
1877 Montenegro. Its People and their History. London.
- Djilas, M.
1958 Land without Justice. New York.
- Djurđev, B.
1954 Iz istorije Crne Gore, brdskih i malisorskih plemena. RNDBIH 2.
- Djurđev, B.
1960 Novi podaci o najstarijoj istoriji brdskih plemena. IZ.
- Djurđev, B.
1965 Postanak brdskih, hercegovačkih i crnogorskih plemena. ZC 19-20.
- Dučić, S.
1931 Život i običaji plemena Kuća. SEZ XLVIII.
- Durham, M. E.

- 1909 High Albania. London.
Durham, M. E.
- 1928 Some Tribal Origins, Laws and Customs of the Balkans. London.
Durham, M.E.
- 1931 Preservation of Pedigrees and Commemoration of Ancestors in Montenegro. Man 31.
Erdeljanović, J.
- 1907 Kući, pleme u Crnoj Gori. SEZ VIII.
Erdeljanović, J.
- 1909 Bratonožići. Pleme u crnogorskim Bridima. SEZ XII.
Erdeljanović, J.
- 1911 Postanak plemena Pipera. SEZ XVII.
Erdeljanović, J.
- 1920 Etničko srodstvo Bokelja i Crnogoraca. GSA XCVI.
Erdeljanović, J.
- 1921 Neke crte u formiranju plemena kod dinarskih Srba. GGD.
Erdeljanović, J.
- 1926 Stara Crna Gora. SEZ XXXIX.
Erdeljanović, J.
- 1926 Stara Crna Gora. Etnička prošlost i formiranje crnogorskih plemena. Beograd.
Erdeljanović, J.
- 1936 Forschungen über Alter, Organisation und Überlieferungen serbischer Stämme in Montenegro, Herzegovina und in den Nachbargebieten Jugoslaviens. IAE 33.
Haberlandt, Arthur
- 1917 Kulturwissenschaftliche Beiträge zur Volkskunde von Montenegro, Albanien und Serbien. Zeitschrift für österreichische Volkskunde 23-12.
Hasluck, M.
- 1954 The Unwritten Law in Albania. Cambridge.
Islami, S.
- 1952 Semeinaia obshchina albantsev v period ee raspada. Sovetskaia etnografiia 3.
Ivanova, I. V.
- 1961 Obychnoe pravo severnoi Albanii kak etnograficheskii istochnik. Sovetskaia etnografiia 3.
Ivanova, I. V.
- 1973 Severnaia Albaniia v 19-nachale 20v. Obshchestvennaia zhizn. Nauka, Moskva.
Jelić, I. M.
- 1926 Krvna osveta i umir u Crnoj Gori i Severnoj Albaniji. Beograd.
Jireček, K.
- 1952 Istorija Srba. Beograd.
Jovičević, A.
- 1910 Riječka nahija u Crnoj Gori. SEZ XV.
Jovičević, A.
- 1923 Malesija. SEZ XXVII.
Kovijanić, R.
- 1963 Pomeni crnogorskih plemena u kotorskim spomenicima. Titograd.
Kulišić, Š.
- 1957 O postanku i karakteru našeg bratstva. Pregled 9-1, 2-3.
Kulišić, Š.

- 1957 Arhaično bratstvo u Crnoj Gori i Hercegovini. GZM.
Kulišić, Š.
- 1963 Tragovi arhaične rodovske organizacije i pitanje balkanskoslovenske simbioze. Beograd.
Kulišić, Š.
- 1976 Balkanski supstrat u dinarskoj rodovskoj organizaciji. Godišnjak ANUBIH XV.
Kulišić, Š.
- 1980 O etnogenezi Crnogoraca. Titograd.
Lalević, B. i I. Protić
- 1903 Vasojevići u crnogorskoj granici. SEZ V.
Lalević, B. i I. Protić
- 1905 Vasojevići u turskoj granici. SEZ VI.
Luburić, A.
- 1930 Drobnjaci, pleme u Hercegovini. Beograd.
Mihailović, V.
- 1970 Jedna međjuplemenska nepravda u Crnoj Gori. GCM 3.
Mijović, P.
- 1957 O nekim slabostima proučavanja crnogorskih plemenskih organizaja. JCFS 1.
Mjeda, L.
- 1901 Das Recht der Stämme von Dukadschin. Zeitschrift für Ethnologie 33.
Petrović, D.
- 1977 Mataruge u kasnom srednjem veku. GCM 10.
Petrović, R.
- 1981 Pleme Kući 1684-1796. Beograd.
Radusinović, P. S.
- 1970 O nekim crtama plemenske organizacije u Crnoj Gori. GCM 3.
Rajković, N. P.
- 1968 Pleme Kosijeri 1439-1945. Cetinje.
Rovinskii, P. A.
- 1897 Chernogoriii v eë proshlom i nastoiashchem, II. Petrograd.
Simić, A.
- 1967 The Blood Feud in Montenegro. In: Essays in Balkan Ethnology, Berkeley.
Škerović, N.
- 1954-5 Naše pleme novog doba. Medjuplemenski i medjunarodni odnosi. Istoriski časopis 5.
Šobajić, P.
- 1923 Bjelopavlići i Pješivci. Plemena u crnogorskim Brdima. SEZ XXVII.
Šufflay, M.
- 1925 Srbi i Arbanasi. Beograd.
Tomić, S.
- 1902 Drobnjak. SEZ IV.
Tomić, S.
- 1949 Banjani. SEZ LIX.
Tomić, S.
- 1949 Piva i Pivljani. SEZ LIX.
Vlahović, V.
- 1939 Medjuplemenski odnosi u Brdima. Zapisi. GCID 22, 1-6.
Vukčević N.

- 1982 Etničko porijeklo Crnogoraca. Beograd.
Vukmanović, J.
- 1960 Paštrovići. Antropogeografskoetnološka ispitivanja. Cetinje.
Vukmanović, J.
- 1964 Plemensko uredjenje, karakter i sudjenje narodnih glavara u Crnoj Gori. GEMC 4.
Vukosavljević, S.
- 1957 Organizacija dinarskih plemena. Beograd.
Whitaker, I.
- 1968 Tribal Structure and National Politics in Albania, 1910-1950. In: History and Social Anthropology, ed. I. M. Lewis. Tavistock, London.
- Whitaker, I.
- 1976 Familial Roles in the Extended, Patrilineal Kin-Group in Northern Albania. In: Mediterranean Family Structure, ed. J. G. Peristiany. Cambridge.

ABBREVIATIONS

- GCID Glasnik Cetinjskog istorijskog društva
GCM Glasnik Cetinjskog muzeja
GGD Glasnik Geografskog društva
GSA Glasnik Srpske akademije
IAE Internationales Archiv für Ethnographie
IZ Istoriski zapisi
RNDBiH Radovi Naučnog društva Bosne i Hercegovine
SEZ Srpski etnografski zbornik
ZC Zgodovinski časopis
ZFFBU Zbornik Filozofskog fakulteta Beogradskog Univerziteta

(1994年 5月10日 受理)